

## Users' Report

地域拠点病院として、経腸栄養分野の  
誤接続防止コネクタ・国際規格製品をいち早く導入

## NTT東日本関東病院



杉田 匡聡先生(産婦人科部長 医療安全管理室長)

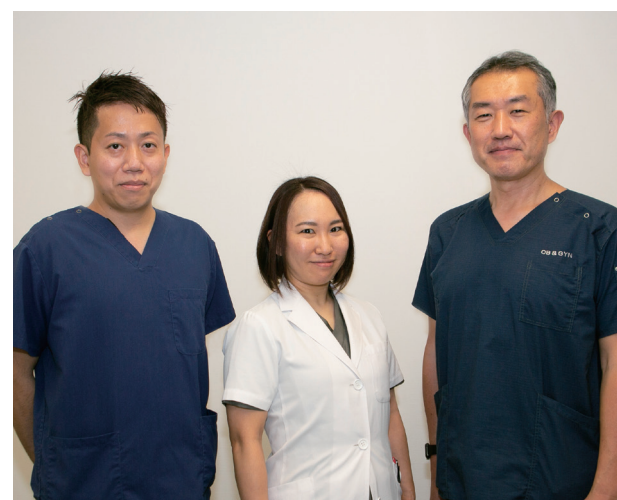
山口 智史さん(臨床工学技士・専従医療安全管理担当)

辻 祐子さん(栄養サポートチーム専従管理栄養士)

に周知することの難しさを実感している。ニューズレターや学習会などでISO製品の導入の周知を図ってきた。それでもなお、「私は聞いていない」「まさか今日が導入日とは思わなかった」などという声もあがった。「当院には1500名近いスタッフがいます。最終的には現場で周知を図っていくしかないのでは」と山口さん。

早期導入を行った意義について、杉田先生は「何事も最初に新しいことを行うのは大変です。しかし、当院のような地域拠点病院が先に、例えばISO製品の色調を紫色で統一すれば、周辺医療機関もそれに合わせやすくなります。その結果、医療機関間での色の混在がなくなり、ひいては医療事故のリスク軽減につながります」と語る。

旧規格製品の販売終了までと1年余り。職員への周知や課題の対応などを考えると、時間に余裕があるとは言いがたい。販売終了直前に導入する医療機関が多いと、旧規格製品が不足して入手困難になるとも限らない。早く導入するにこしたことはない。しかし、どこから着手し



たらよいのか——。「院内で採用されている医材を洗い出し、どれが新規格に対応させるものなのかを明確にすることから始めてみては。何か質問等あれば、ぜひ直接NTT東日本関東病院にご連絡ください」。先陣を切った同病院医療安全管理室からのアドバイスだ。

## NTT東日本関東病院 NTT Medical Center Tokyo



写真提供：NTT 東日本関東病院

開設 1951年12月、関東通信病院として開設  
所在地 東京都品川区東五反田5丁目9番22号  
病床数 594床  
職員数 約1450名  
診療科目 救急科、総合診療科、循環器内科、消化器内科、消化管内科、肝胆膵内科、胆膵グループ、脳神経内科、高血圧・腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、腫瘍内科、感染症内科、リウマチ・膠原病科、心療内科、呼吸器センター、呼吸器内科、呼吸器外科、外科、心臓血管外科、脳血管内科、脳神経外科、ガンマナイフセンター、整形外科、スポーツ整形外科、人工関節センター、脊椎・脊髄病センター、乳腺外科、歯科口腔外科、皮膚科、泌尿器科、前立腺センター、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、小児科、精神神経科、放射線科、ペインクリニック科、リハビリテーション科、緩和ケア科、病理診断科、予防医学センター(人間ドック)、麻酔科、集中治療科、国際診療科

## ISO 80369-3 経腸栄養分野コネクタの変更に関する情報をWEBで公開しています

## ISOに関するお問い合わせは

ISO専用ダイヤル(通話料無料)

0120-922-737

フリーコール

受付時間:9:00~17:00(平日)

JMS ISO 栄養

QSEARCH



タブレットやスマートフォンなどはこちらからどうぞ→

取り扱いガイドや動画(DVD)もご用意しておりますので、ご用命は弊社担当者までお問い合わせください。



製造販売業者  
株式会社 ジェイ・エム・エス  
〒730-8652 広島市中区加古町12番17号  
<http://www.jms.cc/>

2020.07.10XA233-HS

## NSTと連携して進めることに

経腸栄養分野のISO製品の導入では、医療機関によっては栄養部、あるいは事務が主導するかもしれない。NTT東日本関東病院の場合は、医療安全管理室が自ら手を挙げた。同室長で産婦人科部長の杉田匡聡先生は、「かつての当室のメンバーは医師、看護師、事務方、薬剤師でした。このメンバーだけだったら挙手することに躊躇したと思います。しかし、昨年5月に臨床工学技士の山口さんが専従メンバーとなったことで、私たちは安心して取り組むことができました」と話す。

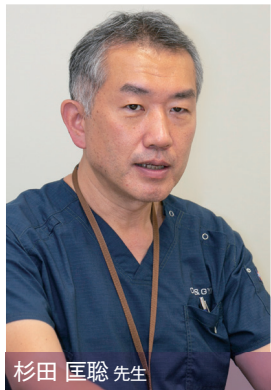
その山口智史さんは常々、当院のスタッフには最新の

情報や医療を患者に提供してほしいと思っていた。そのためには経腸栄養分野のISO製品をいち早く導入する必要がある。できれば、新人スタッフが入職する前の2020年3月までに導入しておきたい。その理由を「現行スタッフがISO製品について熟知していれば、4月からの新人教育に余計な手間をかけずに済みます。また、早めに導入準備に取りかかれば、事前に懸念された課題について対応策を講じることもできます。そして何よりも地域医療の拠点病院として、先行事例を情報発信できます」と説明する。

山口さんの提案を受けた杉田先生は即座に賛成し、経営者側との導入承認に関わる交渉役を引き受けた。

山口さんは早速、導入の準備に取りかかった。最初に





杉田 匡聡先生

行ったのは、院内の変更が必要な医療材料（以下、医材）のリストアップだ。中には馴染みのない医材の名前もあった。「JMSの担当者が医材に詳しく、丁寧に教えてくれました。そのおかげもあって全体像を把握でき、栄養サポートチーム（以下、NST）と連携すれば、導入は難しくないと確信しました」（山口さん）。

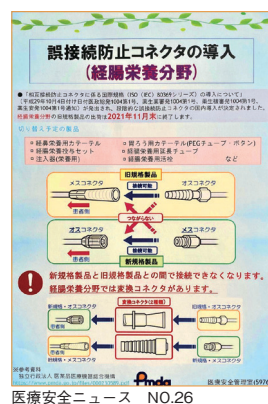
NSTの辻祐子さんは「今回の導入については、日本静脈経腸栄養学会（現日本臨床栄養代謝学会）からの情報等で把握しておりましたが、具体的にどう動いていけば良いかは模索中でした。そのため、JMSにご協力いただき、まずはNSTメンバーへの勉強会を開催しました。実際にISO製品を手にし、JMS担当者に質問をしながら理解を深め、導入後に起こりえる課題を明確化させました。それでもなお、臨床の場で実際に使ってみなければわからないことや、導入後思いもよらない問題が出てくることも予想されました。それらは、その都度解決していくほうが効率がよいと考え、NSTメンバーがおおむね理解した時点で、導入の流れを具体化していきました」と話す。

そうしたNSTの動きを見た山口さんは「実際に使うようになれば、現場スタッフはそれほど苦労することなく慣れていくに違いない」と感じたという。

## ニュースレターや学習会で周知を図る

医療安全管理室では、定期的に発行しているニュースレター「医療安全ニュース」を随時活用して、職員への周知を図ることにした。19年8月22日発行号（No.26）では誤接続防止コネクタの導入について、そして20年1月6日発行号（No.40）では院内における経腸栄養分野のISO製品導入を3月10日に行うことを告知した。

また、メーカーが違くとISO製品の嵌合が合わない可能



性があることや、メーカーによって発売時期が異なることから、ISO製品導入前の11月には、一部の製品をJMS社製へ切替を実施した。

もう一つ、導入前にしておかねばならなかったのが懸念事項の解消だった。例えばシリンジにおける薬剤の採液の問題。旧規格製品に比べISO製品のシリンジ先端の口径が大きく、採液が難しくなることが考えられたため、同病院では「ジェイフィードEN採液チップ」の採用を決定。導入前に簡易混濁法で溶解した薬剤をEN採液チップで採取するテストを行い、問題がないことを確認した。

また、粘度の高い（20,000mPa・s）半固形栄養剤を使用していることから、口径が小さいISO製品でも、接続部がはずれることなく以前と同等の時間で半固形栄養剤を注入できるか懸念された。これについては、栄養剤メーカーの協力を得て事前にテストを行った結果、問題ないことが確認できた。

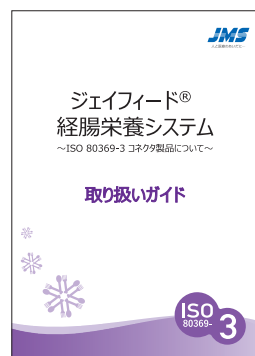
カテーテルコネクタの衛生管理も心配された。ISO製品のオスコネクタネジ部分への栄養剤の付着により細菌汚染した場合、細菌性腸炎発生のリスクがあったからだ。感染対策チーム（ICT）と対応策を協議し、「ジェイフィードENスワブ」を採用した。付着が予想される栄養剤注入後のコネクタをENスワブでクリーニングするテストを実施し、問題ないことを確認。また、チューブ類の洗浄方法に関するマニュアルを作成、関連部署に再周知し衛生管理に努めた。

こうした懸念事項を一つひとつ対処していくとともに、ISO製品の導入を1カ月後に控えた2月、NSTが中心となり、各病棟、内視鏡センターや救急センター、外来など関連部署で学習会を実施した。このときに活用したのが、JMS担当者が用意した取り扱いガイドだ。非常にわかりやすいと好評だったという。

関係部署にISO製品の必要定数を聞き、一覧にまとめる作業を行ったのもこの頃だ。この一覧には、スタッフが間違っず請求しないように、旧規格製品とISO製品のそれぞれの物品コードの欄を設けるという工夫をこらした。



山口 智史さん



JMS 取り扱いガイド

## 高齢者にもわかりやすい患者向け案内文書を作成

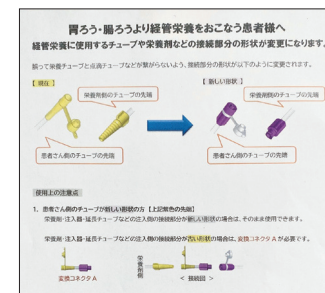
経腸栄養の医材は胃瘻や腸瘻を造設した在宅患者も取り扱う。患者の多くは高齢者で、ISO製品への変更戸惑うことが予想された。そこで辻さんたちは外来看護師と情報共有を

しながら、変更を知らせるイラスト入りの患者向け案内文書を作成した。この案内は、ISO製品に変更となったタイミングで、NSTメンバーや外来看護師が対象となる在宅患者へ説明する際に利用している。

また、胃瘻・腸瘻を造設した患者は、同病院の売店でチューブなどの医材を購入することも多いことから、売店と連携し、商品名と写真、価格等を載せた医材販売品リストを作成。看護師やNSTメンバーが患者の経腸栄養管理に必要な物品番号に丸を付け、患者はそのリストを持って売店に行くという流れを整えた。「このリストによって、患者さんが求める医材をスムーズに販売できるようになったと、売店からも喜ばれています」（辻さん）。

導入後、旧規格製品を使用していた患者がISO製品を購入し、嵌合が合わないとの相談が1例あったものの、変更に伴う患者の混乱はほとんど見られていないという。

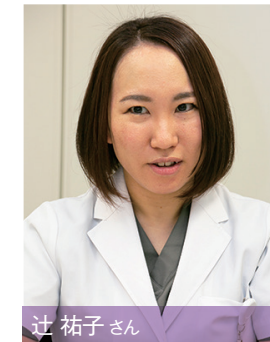
一方、地域の拠点病院である同病院には周辺のクリニックから紹介されてくる患者が多い。「開業の先生方一人ひとりにお知らせすることは大変な作業になるため、当



患者向け案内文書

院が関係する2つの医師会に地域連携室を通して切替日を連絡し、そこから会員の開業医の先生方に伝えていただくことにしました」（杉田先生）

同病院では相互評価連携病院に紹介することもあることから、連携病院にもその旨を事前に通知した。



辻 祐子さん

## まずは医材の洗い出しから着手しては

万全の準備を経て、予定どおり20年3月10日、経腸栄養のISO製品の導入を行った。

ISO製品の設置は不要と言っていた診療科で急に必要になり、病棟から取り寄せて対応したり、A社とB社で嵌合が合わないことがわかったりしたが、それ以外には心配していたほどの混乱や問題は起きていない。

今回の導入を振り返り、山口さんらは改めて職員全員

